

# 大人になってから読む児童文学：「子ヒツジ売りのネット」

難波 美和子

## 1. 美しい田園地方

「コッツウォルズ」はイングランド西部の丘陵地帯である。イギリスの首都ロンドンを流れるテムズ川は、この丘陵に源を持つ。日本でもコッツウォルズはイギリスの田園地帯（カントリーサイド）としてよく知られている。「蜂蜜色の村」、イングランドでもっとも美しい村などと呼ばれるカースル・クーム、さまざまな建築様式の調和で知られるチッピング・キャムデンなどは観光地として人気がある。この地方は古い村や街並みが残っている。藁ぶき屋根、黄色がかかった石壁づくりの民家が並ぶ集落はイングランドを代表する風景である。（写真1・2）

コッツウォルズ地方は古くから羊の飼育が盛んで、羊毛の織物業で知られていたが、産業革命による動力の蒸気への転換にともない、19世紀始めまでに衰退した（門田153）。その結果、古い家々がそのまま残ることになったのだろう。

19世紀後半になると、工業化と都市化を背景に、自然へのあこがれや健康のために田園を訪れることが流行した。自然回帰思想は田園をイギリスの象徴と見なし、そこに「理想化されたイギリスのイメージ」を見出すようになる（赤瀬169-170）。その際に工業化されたロンドンなどの大都市とは正反対の「自然」を体現する田園としてコッツウォルズや湖水地方が保養地として発見されていく。領地という田園を持つ貴族と違って回帰すべき田園を持たない中流階級の人びとはこうした保養地を目指した。

過疎化したコッツウォルズには19世紀末にウィリアム・モ里斯のアーツ・アンド・クラフト運動の影響を受けた職人たちが移り住んだ（門田154）。理想化された田園風景と古い家並が残っていること、鉄道の開通によってロンドンからの交通の便がよくなつたことが彼らを引き付けたと思われる。このような産業革命以前のイングランドを理想化した「メリーイングランド」のイメージが、衰退したコッツウォ



写真1 コッツウォルズ地方・ブロードウェイ（著者撮影）

ルズを「美しい村」へと発展させたのだった。

羊飼いが羊を飼い、平和で満ち足りた世界としてのコツツウォルズのイメージを私に印象付けたのが、小学校低学年で出会ったアリソン・アトリーの「子ヒツジ売りのネッド」という作品だった。実は、この物語にはコツツウォルズは登場しない。登場人物によって、その美しさ、穏やかな暮らしへのあこがれが語られる。直接に描かれることで、一層、どんなに素晴らしいところなのか想像が膨らむというものだ。

「子ヒツジ売りのネッド」は、コツツウォルズと羊を結び付け、イギリスの地方についてのイメージを作るのに一役買った。しかし、コツツウォルズが理想の田園としてのイメージを獲得した19世紀末の社会背景を知ってからは、この作品がいくつもの架空のイメージの上に成り立っていることが見えてきた。

## 2. 「子ヒツジ売りのネッド」

アリソン・アトリー (Alison Uttley, 1884-1976) は『グレイ・ラビットのおはなし』や『時の旅人』で知られる。アトリーはダービーシャーという「田園」に生まれ育ち、田園の邸宅や農家を背景にした物語を多く書いた。コツツウォルズには1936年から何度か親しい友人や家族と休暇を過ごしている (Judd 134, 202)。

「子ヒツジ売りのネッド」(Young Lambs for Sale) は、日本語版では『アンと山の小ないと』に収められている。原書版では、The Cobbler's Shop and Other Stories に日本語版のタイトルとなった「アンと山の小ないと」(The Lead Miner)とともに12編の4番目の話として掲載された。原題は、おもちゃのヒツジの売り声「子ヒツジはいかが! (Young lambs to sell!)」による。

この歌はナーサリーライム、いわゆる「マザーグース」に数えられている。売っているのは本物ではなくおもちゃの羊だ(谷川 47・堀内誠一挿画参照)。ナーサリー・ライムの成立時期はまちまちだが、中には16、17世紀の木版印刷などまでさかのぼれるものもある。「子ヒツジ売りのネッド」はこの歌がおもちゃの羊売りの口上として効果的に登場する。

物語の舞台は17世紀のある年の冬のロンドンである。様々な物売りに交じって、羊のおもちゃを売る若者、ネッドがいる。彼は父親とともにロンドンで金を稼ぐためにコツツウォルズからやってきた。父親が作る子羊のおもちゃはまるで本物のようだ。実は二人が眠ると子羊たちは命を得て、寝具の上で遊んでいた。やがて厳しい冬で父親が病気になり、蓄えもわずかになってしまう。

そのころ王宮では幼い王子チャールズが病気になり、医師たちや母の女王が困り果てていた。年老いた乳母が見守る中、熱に浮かされた王子が「メエエエって、なきながら、あるいはいるよ」と言い出した。窓を開けてみると、雪の向こうからネッドが子羊を売る声が聞こえてきた。王子はネッドを病室に呼び寄せ、羊をすべ

てを買い上げた。そして羊たちをベッドに並べて眠りに落ちると、翌朝には熱が引いてしまっていた。王子は「大きくなったら、ヒツジ飼いになりたいな」という。

女王がネッドに礼を言い、望みを尋ねるとネッドの答えは、故郷で暮らせるよう、お金がほしいことだった。女王はネッド親子に、貴族の子供たちのためにたくさんの子羊を作るよう言った。ネッドの父親は王子と会い、子羊が本物であるかのように世話の仕方を教える。二人は十分なお金を手に入れてコツツウォルズに帰つていった。その後、同じような羊をネッドが歌った歌を歌いながら売り歩いた人はいたけれど、あれほど本物そっくりの羊は二度となかった。

ここで描かれるロンドンの人びとの暮らしは、歴史的事実に基づくものではないだろう。冒頭に描かれる行商人や職人の姿は、19世紀のロンドンの街角にも見える。子羊たちが「17世紀のロンドンの町なみを、じっとみつめていました」(84)と述べられることで、歴史上の時間軸に位置づけられるが、語りはとても曖昧だ。

### 3. 17世紀ロンドンの冬

イギリス史において、17世紀は体制転換の時代だ。エリザベス1世の死によるスチュワート朝への移行、清教徒革命、王政復古、名誉革命と打ち続く。その転換の時代のどこに、子ヒツジ売りのネッドは登場するだろうか。歴史上の時間軸に物語を確定する情報は多くはない。王宮がホワイトホールであったこと、王子の名がチャールズであること、王子の乳母は父王が幼いころにコツツウォルズからやってきたことくらいだろうか。

ホワイトホール宮殿は16世紀から17世紀まで王宮であり、1622年に大規模の拡張工事が完了している。17世紀にはチャールズという王子は後のチャールズ1世と2世の親子がいる。しかし、スコットランド出身のジェームズ1世にコツツウォルズ出身の乳母がいることは考えにくい。チャールズ2世なら、父の代にコツツウォルズからやってきた乳母がいてもおかしくはない。1630年生まれのチャールズ2世が6,7歳のころであれば、清教徒革命へと続く政治的緊張はそこそこにあっても、ロンドンの街は平穏であったかもしれない。

しかし王子のモデルは実在の人物ではなく、物語を17世紀に設定するためにスチュワート家をイメージさせる名前を選んだと考えたほうが自然だ。ネッドが街に現れる場面で、人々は、彼の売り口上を聞いたことのない、目新しいものと受け止め、「コツツウォルドのほうからきた、ほら、あのれいのおひやくしようたちのひとりだよ、きっと」(86)と言う。16世紀に始まる「囲い込み」によって土地を持たない羊飼いたちが放牧地を追わされた。17世紀の初めにも各地で囲い込みをめぐる暴動が起こっている。羊毛生産の効率化を目指した囲い込みでは、コツツウォルズでも多くの羊飼いが牧草地や家を追われたと考えられる。その一人がロンドンでヒツジを売るには、17世紀前半がふさわしい。

「羊飼い」はキリスト教におけるイエス・キリストの比喩であり、プロテスタント教会においては「牧師」というように、人々を導く存在である。したがって、幼い王子が「羊飼いになる」ことを願うのは、大人たちの目から見れば、「良き王」になることを表す。チャールズ王子を架空の17世紀ロンドンに置けば、彼はやがて良き羊飼いすなわち「良き王」になることだろう。

チャールズ王子を後のチャールズ2世の影から引き離すことはできない。その時は、幼い王子の未来は、波乱に満ちている。まもなくイングランドは内戦に突入し、王子は命からがら大陸に亡命し、父王は処刑される。放浪の後、帰国して王位につくが、「陽気な王様」と呼ばれるチャールズ2世はコツツウォルズの純朴な羊飼いとは無縁だ。一方、歴史の時間軸にネッド親子を置くと、彼らにも波乱が待っている。彼らは金持ちになり、おもちゃ作りで有名になり、ほんもののヒツジを買ってふるさとの村に帰って行ったが、内戦の時代には、国王派か議会派の選択を迫られることになったことだろう。

歴史の上に置くと、穏やかな結末を不穏なものに変えてしまうが、『王子と乞食』のように、想定されるモデルを、史実から切り離して物語の中で理解するといい。それでも囲い込みによって羊飼いたちが置かれた状況を想像し、「お金がどっさりあつたなら、子ヒツジ売りになど、きやしない」(87)という詩句を、人々の叫びとして理解できる。

#### 4. 描かれるコツツウォルズ

コツツウォルズは古くから羊の飼養で知られていた。というより、石灰岩質の丘陵地はヒツジを飼うことが最も有利で、大麦が収益が上がった(門田145)。羊毛の集積地となった町は繁栄する一方、丘陵地は「不毛」で辺鄙、そこに住む人々は貧しい農民か羊飼いであり、決して好ましいイメージを持っていたとはいえない。このような地域が、美しい自然の広がる憧れの田園へとイメージを変えたのは、ロマン派の時代以後のことだった。更に人々が訪れるべき健康的な場所へと転換するのが19世紀終りであった。鉄道の開通によって交通の便がよくなり、休暇を過ごす場所になっていった。草しか生えない石灰岩質の土地が愛らしい花を咲かせる野原となり、都会から訪れた人々が散歩をし、ピクニックを楽しむようになった。「子ヒツジ売りのネッド」は17世紀を舞台としているが、そこに描かれるコツツウォルズへの視線は、19世紀末から20世紀に成立した自然回帰運動に近い。ロンドンは雑然として、人々はものの眞の価値を理解しない。田園は豊かで美しい。しかし、田園でも金銭が絶対に必要になっているために親子はロンドンへ出ざるを得ない。

ネッドの父親はヒツジへの愛情の深い人物であり、木で生き生きとしたヒツジを作ることができる。心を込めて作り、安易に儲けようとはしない。その態度は、日

常の生活と自然を愛し、技術に誇りを持つ、アーツ・アンド・クラフト運動が理想とする職人像でもある。産業革命以前の世界を理想化し、有ってほしい世界を描き出す。「子ヒツジ売りのネッド」は、仮想された17世紀を舞台に、19世紀以降の田園志向に則って美しいコツツウオルズの羊飼いを描いた。それが田園のイメージを再生産していくのである。

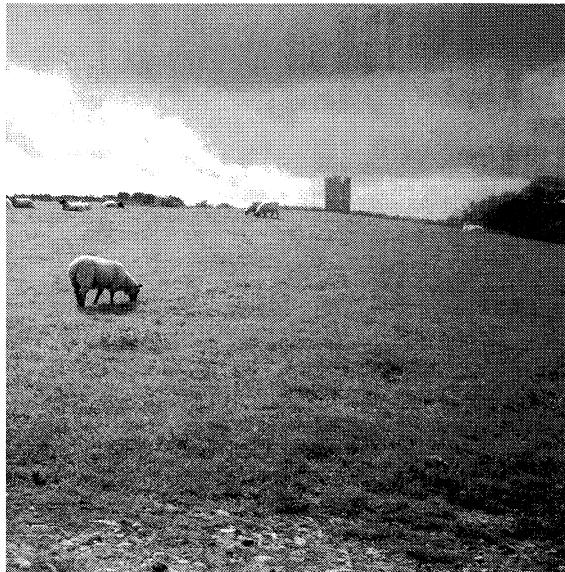


写真2 プロードウェイの牧草地（著者撮影）

\* ネッドの歌の原文（ナーサリー・ライムでは最後の2行ではなく、アトリーの付加と思われる）

“Young Lambs to sell! Young Lambs to sell!  
Young Lambs to sell! Young Lambs to sell!  
If I'd as much money as I could tell,  
I wouldn't come here with young lambs to sell.  
Two for a penny, eight for a groat,  
As fine young lambs as ever were bought.” (Uttely.54)

---

## 参考文献

Judd, Denis. *Alison Uttley: Spinner of Tales*. Manchester U Pr.: Manchester, 1986

Uttley, Alison. “*Young Lambs for Sale*”. in *The Cobbler's Shop and Other Stories*. Faber and Faber: London. 1950.52-65

赤瀬理穂「田園化された身体——前世紀転換期イギリスのフィジカル・カルチャー」、英米文化学会監修・上野和子他編著『ヴィクトリア朝文化の諸相』彩流社、2014. 161-183.

アトリー、アリソン「子ヒツジ売りのネッド」『アンと山の小びと』鈴木武樹訳、学研、1967.81-121

門田昭夫『英国カントリーサイド紀行』里文出版、1999

川崎寿彦『楽園と庭 イギリス市民社会の成立』中央公論社、1984

谷川俊太郎訳『マザーグースのうた 第2集ばらのはなわをつくろうよ』草思社、1975